

作り物のいのち 前編

平成 24 年 10 月 1 日(月)

幻想譚工房

私は食堂で早めの昼食をとっていた。午後一番からクヴァレの立ち会で火器管制の動作試験を行うことになっていたから、早めに昼食をとるように指示があったのだ。

食堂はがらんとしており、私を含めて数人しかいない。コック達はこれから来る昼ピークに向けて忙しそうに動き回っている。

窓の外から聞こえてきたセミの音が、私の目を窓の外の世界に誘い出した。庭の木々は青々と生い茂り、桜が咲いていた頃の面影を全く残していない。

クヴァレが来てから、一ヶ月が経とうとしていた。

クヴァレは二十一日の謹慎処分を病室で過ごしたあと、初めはおとなしくデータの収集をしていた。しかし必要なデータが大方集まってくると、食事の時間も惜しいといわんばかりに毎日弁当を持ち込んで昼休みも調整室に詰めるようになった。

ソフィアは通信士、戦術士として働くための訓練をつけるために、ここ最近は何都市上空を飛び回っているようだった。

これからお互いに忙しくなる中で、せめて食事くらいは二人で一緒に食べようと、いつからか先に食堂についた方が席を確保することになった。

クヴァレは、食事に誘っても弁当があるからと断られてしまう。食堂通いの私が弁当など作れるわけがなく、しばらくは別々に食事を取るようになりそうだ。

「ここ、空いてるかしら？」

横からの声に顔をあげると、卯月はそのまま向かいの席にパスタの乗ったトレイを置いた。

「そこはソフィアの席だ」

「いいじゃない。昼までまだ時間があるし、戻ってくる前に食べ終わるわよ」卯月はそう言いながら席に座ると、フォークでパスタをぐるぐると巻き始めた。

「それはそうと、どうして亀ちゃんところの蛇はあんなに仕事が早いよ、あなたたち三週間も謹慎してたんじゃないの？」

そう言いながらパスタを丸飲みする卯月。蛇とはクヴァレの事らしかった。この間ペリカン呼ばわりされたことを根に持っているようで、周りにクヴァレ君は蛇よなんて言って回ってるのを見かけたのだ。まあ、卯月は根に持つような性格ではないが。

「それが……私も分からないんだ」

クヴァレとはあのときの約束通り二人で協力して作業をしている。昼に引きこ

もるのは今まで通りだが、クヴァレはあの日以来徹夜をしていなかった。それなのに、気がついたらほかのメンバーと足並みが揃ってしまっていたのだ。

「入院中もこっそり仕事してたんじゃないの？」

「それは……無いと思う」

クヴァレは私から取り外したバッテリーを持ったまま爆発に巻き込まれたから、とりわけ腕へのダメージが大きかった。腕は交換となり、腕と体の関連付けはほぼ二週間かけて行われた。その間作業はおろか、ペンを持つこともできなかったはずだった。

「クヴァレは両腕をケガしてたんだ、卯月も見ただろう」

そう言うと、卯月は待ってましたと言わんばかりに自信満々に言い放った。

「ふふん、蛇だけに手がなくても仕事をするかもしれないわよ」

「うくっ、まさかそんな」

思わず吹き出してしまった。クヴァレならやりかねないと思ってしまったのだ。クヴァレが普段と変わらない済ました顔で棒状のものを口に加え、一心不乱に端末にデータを書き込んでいる様子を想像したらじわじわと笑いが込み上げてきた。

「……亀ちゃん、変わったわねえ」

必死で笑いをこらえてる私に卯月がそう呟いた。予想外の言葉にびっくりして顔をあげると、卯月も驚いたような表情で私を見ていた。

「変わった？ どこが？」

「前は冗談を言っても笑うなんて事無かったのに、人前で笑顔を見せるなんて。蛇ね、蛇のせいなのねっ」

そういうと卯月は素早く私の後ろに回り込み、グーで私のこめかみをグリグリ押さえつけてきた。

「痛たた。やめてくれ、卯月」

「ああっ。卯月さん、ふみちゃんになんて事をしてますの？」

ソフィアが来てくれたお陰で助かった。卯月は仕方ないという風に私から手を離すと、隣のテーブルから椅子をひとつ持ってきて私の隣に座った。

「いつも感情のない亀ちゃんが、突然笑うんだもの。驚いちゃったわよ」

そんなに私は感情がないと思われているんだろうか、確かに無表情かもしれないと思うが、自分の中では感情がはっきり出てると思ってただけに少しだけショックだ。

「あら、ふみちゃんは感情豊かですわよ。微妙なしぐさや雰囲気は何を考えてるのかすぐにわかりますもの」

ソフィアがトレイをテーブルに置きながら言った。

「それに、感情が表に出にくいだけですわ。感情が無いなんて言われたらさす

がのふみちゃんも嫌な気分になりますわよ」

……感情がないと言われるのも嫌だが、ここまでびたりと読み当てられるのもこれはこれで複雑な気分だ。

「……そこまで分かるまでにいったい何年かかるのよ」

卯月があきれたといった表情をしながらパスタの残りに手をつける。席に座ってカフェオレに口をつけるソフィアの背後から、クヴァレが近づいてくるのが見えた。

「文月、時間だ。ついてきてくれ」

「もう行っちゃうの？」

「午後一番で動作試験が入ってるんだ、悪いが文月を借りていくぞ」

「終わったら返してくださいね」

「終わったらな」

「ソフィア、卯月、また後で」

いつのまにか食堂は大賑わいになっていた。私は食器を返却口に返すと、小走りでクヴァレの後を追いかけた。食堂の入り口で待っていたクヴァレにさっきの質問を投げかけてみた。

「ところでクヴァレ、口で端末を操作したことがあるか？」

「……何言ってるんだ？」

「何でもなし……。ただ言ってみただけだ」

「クヴァレ？ おお、クヴァレじゃないか」

「ハワードさん」

食堂から整備室に向かう途中の事。突然背後から見知らぬ人がクヴァレの名を呼んだ。振り返ると、一人の青年が階段を駆け下りてくる場所だった。

体格はクヴァレと同じくらいで、少し背が高い。ハワードと呼ばれた青年は、クヴァレのもとへ駆け寄るとくしゃっと金髪をかき上げた。

「こちらはハワードさんだ。以前いた場所でお世話になっていた人だ」

「はじめまして、ハワードです」

ハワードは恭しくお辞儀をした。クヴァレの知り合いと言うことは軍医の時の先輩だったのだろうか。ただ、軍医と言うと何となく違和感がある。白衣よりも作業着が似合いそうだなと思った。

「こちらは文月です、今は彼女の整備を担当してます」

「よろしく」

お辞儀をすると、ハワードは不思議そうな表情をした。

「ふむ、見たところ健康そうだし、特にケガや病気を抱えてるわけでもなさそうだな。クヴァレ、こんなかわいこちゃんのどこを診るというんだ？」

「か、かわっ……？」

ギクリとした。まさかこの場面でそんな言葉が出るとは思っても見なかった。私の反応を見てハワードが笑い出すところを見ると、どうやらからかわれてるらしい。

……どうもこういう手合いは苦手だ。結構軟派な性格なのは別に良いとして、その綺麗な青い瞳は節穴なのか、かけてる薄縁の眼鏡が曇っているのかは分からない。

ただ、私をかわいいなどと思う辺り、女の子を見慣れているわけではなさそうだった。軍医こと第一衛生医療課はそんなに男しか居ない職場なのだろうか。ハワードがソフィアをみたら腰でも抜かすんじゃないだろうか。

「治療じゃなくて整備ですよ、文月は研究庁の特別運用部所属なんです」
クヴァレが苦笑いを浮かべながら言った。

「特別運用部だって？」

ハワードはそう呟くと、私を上から下までじっくり見回した。

「そうか、とうとう医者から整備をメインにしたんだな、あれ以来ずっと塞ぎ込んでたから心配してたんだ」

「クヴァレに何かあったのか？」

そういえば病室で失敗したと言っていた。その事と関係があるのは間違いなさそうだった。

「なんだ、文月ちゃんは何も知らないのか。実は前の場所でチームメイトを――」

「ハワードさん、その話はっ」

クヴァレは話出しそうだったハワードの口を遮るように言葉を被せた。ハワードは一瞬はっとした表情をすると、申し訳なさそうにうつおきながら頭をかいた。

「悪かった、それじゃ俺は失礼するよ。じゃあね、かわいい文月ちゃん」

「そ、そういうのはやめてくれっ」

ハワードはそう言いながら背を向けると、笑いをかみ殺しながら歩いていってしまった。

「まったく、軍医はみんなあんな奴らばかりなのか？ クヴァレ」

「……」

「クヴァレ？」

返事がないからクヴァレの方を見ると、なにやら神妙な面持ちで何かを考え込んでるようだった。表情は硬く、私達のところへ来たばかりの頃に戻ってしまったようだ。

クヴァレのチームメイトがどうなってしまったのかは分からない。けれどその

ことがクヴァレの心に重くのしかかっているようだった。もし何か話してくれれば力になれるかもしれないと思うが、この状態でクヴァレから話を聞き出すのは無理そうだ。

「すまない……。少し、一人にしておいてくれないか」

しばらく黙っていたクヴァレが突然口を開いたかと思ったら、そのまま別の方向へ歩き出してしまった。

「調整は？」

「今日は無しだ、ソフィア達のところへ戻って良いぞ」

そう言ってとぼとぼと歩いていくクヴァレの姿は、病室でやつれていた時にそっくりだった。

仕方がないので試験場に中止になった旨を伝えて食堂に戻ったが、既にソフィアと卯月の姿はなかった。食堂は相変わらず大盛況で、ここで休憩するわけにもいかなさそうさ。

ソフィアは航空訓練の時間だろうか、外へと向かう道に向かって歩き出して、はたりと足が止まった。

今ソフィアに会いに行ったら良い気分しないかもな。

卯月の調整方法を見てみよう、もしかしたらクヴァレがたった一週間で他の人と足並みを揃えることができた理由があるのかもしれない。

私は卯月の居る調整室へと向かった。

「で、どうして私のところなのよ」

調整室にいた卯月は少しだけ機嫌が悪そうだった。

「わんこはどうしたのよ」

「今は航空訓練中だろう」

「そう」

そう言うと、卯月はそれ以上聞くのをやめた。

事故調査でソフィアの機体には異常が見られなかった。それなのに墜落してしまった原因は、どうやら心理的要因というのが真相らしかった。ライフルで切りを血の海に染めたとき、一番ショックを受けたのは私ではなくソフィアだったのだ。

「あんなに亀ちゃんにべったりだったあの子が、まさか自分から離れちゃうなんてね」

ソフィアは機体トラブルでも無いのに墜落してしまったことに負い目を感じているようだった。本人は大丈夫と言っていたが、明らかに気にしているのはまわりからもすぐ分かった。

ソフィアは本当は戦術士訓練だけ受けていれば良いはずなので、もっと私と一緒に居る時間があるはずだった。それなのに、時間を見つけては航空訓練を受けているのである。

「寂しいんじゃない？」

「それは……」

寂しくないわけがない。けれど、今のソフィアの気持ちは痛いほど分かっているつもりだった。

「私だって、武器の取り扱い訓練を何度も受けているんだ。それと同じだと思う」

クヴァレのメンテナンス不良と言うことで決着の付いた事件だったが、ライフルが何であるか、どういう時に使うのかを知らずに使ったことが事故の発端だと思っている。今でこそ口にはできるが、事件が起きた後は誰にも内緒で勉強をしたのだった。

ソフィアが飛ぶことに自信が付けば、また一緒に居る時間が取れるのだから。それまでの辛抱というわけだ。

「ところで」

卯月の身体を見渡す。室内で調整をするなら全身にセンサーくらい付けても良さそうなものだが、今の卯月は何も装着していない。

「今は何の試験をしてるんだ？ 確か実施試験に出たのはかなり早かったと思っていたが」

そう言うと、卯月はがっくりとうなだれた。

「実地試験はほとんど何も付けなまま外を歩き回っただけよ、今は装備品のチェックをひとつひとつやってるってわけ」

「軽装なのにそこまで時間がかかるものなのか？」

確か卯月は近距離型だったはずだ。素早く動いて刃で相手を切り倒すのに装備がいるのだろうか。

「高機動ってのはもうちょっと複雑なのよ。それよりも、亀ちゃんのところはどうなのよ。重量型なんだからかなり調整が大変なんじゃないの？」

「今日それをやるはずだったんだが、無しになってしまったんだ」

「随分と気まぐれね、それで本当に大丈夫なの？」

「分からない」

クヴァレのことだから何とかなってるんだろうが、とにもかくにも動かさなければ調整があってるのか間違っているのか分からない。そういう意味では今日の調整が無くなってしまったのはすごく残念だった。

「アリシア、お待たせ」

「さあ、始めるよ」

そうこうしてるうちに整備班の二人が戻ってきたようだった。今日の点検は主推進装置に使うエンジンのようで、それを私含めた四人で一つずつチェックを行っていく。

整備担当の二人に指示を受けながらチェックをしているうちに、クヴァレとは違うところが少しだけ分かってきた。

プロジェクトに所属する人員のほとんどが「研究員」である。その装置がどういう特性を持っているのかをじっくりと見極めた上で、最適な場所を時間をかけて決めていく。

その反面クヴァレは「エンジニア」とでも言うのだろうか。明らかに触り慣れたような手つきでデータシートに目を通した後、軽くチェックをしていくのだ。私がライフルを知らなかったように、研究庁は現場で使われている武器や装置についてはあまり詳しくない。だから時間をかけて取り扱い方法を習得するのだろう。

でもクヴァレは詳しかった。それはやっぱり現場……保安庁で軍医として仕事をしてきたから知識があったわけだ。

『そうか、とうとう医者から整備をメインにしたんだな』

ハワードは、クヴァレが軍医として仕事をしていた傍ら整備もやっていたような口ぶりだった。つまりクヴァレが整備をしていたのは間違いないだろう。ただ引っかかるのは、軍医が整備をやらせてもらえるものなのだろうか。

同じ保安庁でも、整備と医療は兵站部と衛生医療部のようにはっきりと分類されており、全くの別ジャンルなのだ。お互いの内容を知る事ができない環境で、どうやってクヴァレはメンテナンスの知識を身につけたのか、謎は深まるばかりだった。